

第1回下北沢国際人形劇祭2024

DAILY JOURNAL

DAY 6

Monday,
February 26,
2024



S
HIMOK
ITAZAWA I
NTERNATIONAL
PUPPET FESTIVAL

メインプログラム MAIN PROGRAM
The Table
Blind Summit

下北沢国際
人形劇祭

The Table is a show where three puppeteers, dressed in black, animate a white puppet on... a table. Simple as that. I enjoyed it so much that even after the show, I felt a warm and tender feeling in my heart. I was wondering why. I went to a Taiwanese restaurant near the station and continued to ponder. My friend who was with me was worried because I looked blank while holding noodles with chopsticks in the air. When she asked if I was okay, it suddenly clicked.

The protagonist Moses was on stage with us all the time and he spent his precious time entertaining us, that's why. He's my new friend now. Even when Moses was lying on the table, the puppeteers kept him alive and Moses entertained us by shrinking, growing big, and performing astonishing moves, even though he was technically 'absent'. Who else can do that? Jim Carrey?

Moses is free. He is physically very limited, but since his ego doesn't exist there, he is much freer than any of us. That's why he could be with us all the time. He still is in my mind, and he keeps telling me funny jokes. He represents all the people who are not physically present here but whom we continue to think of. He is my grandma who passed away 5 years ago. He is my parents who now live apart. He is my teddies Kuta and Taku who also went on lots of

adventures including space travel (as Moses did too) with me when I was 5.

I know many people would mention its clever meta perspective and structure, as well as its Bunraku reference. Yes, they're important elements to note, but for me, the attraction of *The Table* is the humorous spirit of Moses (which is largely Mark's spirit) and the subtle technique employed by the puppeteers (Mark, Sean, and Fiona) to create that magic.

Naoya Aoki (デイリージャーナル編集部)

上演が終わり、私はスマホの待ち受けをモーセにした。『the table』、これに対して述べる言葉が見つからない。終演後、人形劇や演劇とは全く関わりのない友人に「どう良かったの？」と聞かれたが、口ごもってしまった。ストーリー、というかテーブルの上で行われていたことは、少し複雑だ。何本のストーリーが絡まりあい、最後には一本のストーリーに纏まっている。これから行われる人形劇について、旧約聖書のモーセの最後の12時間について、人形劇を依頼された自分たちについて、人形劇で重要な3つの要素について、これらが最後の結末では絡まり合い、やかて唐突に終わる。コ

メディとユーモアに溢れたモーセは、客と操り手と、そしてテーブルと軽やかに交流し、変化させ続ける。結末のモーセの最期と、現状が交わる終盤なんかは、本当に最高に叙情的で素敵な終わり方だ。「これまで人間が地球上で目にした中で最も面白い段ボールの塊」、モーセは私の心のなかで今でも踊り続けている。

上原英治 (デイリージャーナル編集部)



The Table Blind Summit

舞台の上には木製のテーブルが一台。観客からの拍手喝采を受ける3人の人間に割って入るように、1体の人形が動き話し出す。「The Tableへようこそ！」段ボール、布、そしておそらく多少の綿とおもりで出来た彼は、自分の身体が交換可能なパーツで構成された、頭・左腕担当のマーク、右腕・尻担当のショーン、両脚担当のフィオナの3人に「Bunraku」形式で操られる物体であることを自覚してそれを隠さない。自己紹介を終えた彼は、誕生日会の出し物やおとぎ話の親切なおじいさん役に嫌気が差し、ユダヤコミュニティ・センターからの依頼を受けて「モーセの最後の12時間をテーマにした人形劇」を創作した時のことを話し始める。モーセの生涯の紹介が始まり、その人形劇がいかにか作られたかが語られるのかと思いきや話は脱線。自分の世界であるテーブルや自身の身体について軽妙なトークとアクションを繰り広げ、彼と人形遣いたち、そして観客をも巻き込んだ愉快なドタバタが繰り広げられていく。彼は文字通り人間の手によって理不尽な目に遭い続ける。巨大なレコードプレイヤーに載せられ目を回し、宇宙空間に飛ばされ、不慣れた観客に扱われたせいで右手まで失う。結局、モーセの人形劇は内容が全く決まらないまま、本番当日を迎えたという。彼は「俺がセリフを覚えなくちゃいけないってこと、3人はわかってないんだ」とぼやきながら、何が自分の身体になされるかも知らないまま舞台上に立つのだった。広報でも紹介されていたが改めて衝撃だったのは、彼が「Bunraku」の形式で動いていると宣言したことだった。確かに3人の人間が1つの人形を動かす、頭を動かす「面遣い」が主導権を握っている点は文楽と同じだ。全員黒い服を着ているところも。しかし無視できない違いは沢山ある。胴体が



空洞でバラバラの手足が紐で繋がっている（その上から肉襦袢と衣装を着せることで人間らしいフォルムに整える）文楽人形に対し、彼の体は中綿の詰まった胴体に細長い手足が縫い付けられているだけだ。当然、手足を間接的に操作するための機構もなく、演者が身体をがっしり掴んで彼を動かす。きっと保育園児でも動かせるくらい単純な形。演者も全員顔を隠さないし、彼のセリフは面遣いのマークが担当する。根本的な違いは多々あれど、「Bunraku」は文楽の表面をなぞっただけの劣化コピーではない。文楽において人間は背景に徹し、人形がドラマを形作る。一方で「Bunraku」において人間と人形とを隔てる境界線はない。それは対等ではなくむしろ、人形とそれを動かす人間という関係の不均衡を全面に露出させた状態なのだ。この状態は、人形劇が本来持っているそのアンバランスさを劇的なものとして扱うことを可能にする。「The Table」は両者がバランスを求めて右往左往し、その果てに人間そのものの底知れない質感が現れるめくるめく冒険だった。話慣れして観客を楽しませるのが好き、

まう。人形遣いが形象する動きによってさまざまなシチュエーションに投げ込まれ、翻弄される彼は神に理不尽な運命を与えられ苦悩する人間のようにも見える。モーセと神の挿話はそのイメージを補強する。だが、3人のうち誰かが欠けても、誰か1人がテクニックを持たない観客と入れ替わってしまっても(!)人形は「彼」であることを失わない。先述したように人形を放棄して人形遣いたちが見えない人形を操るシーンでも、むしろ立ち現れるのは「人形を操る」というルールに規定されて動くしかない人間たちの受動性である。人が人形に操られているように見える時、その立場は容易に反転する。人形は、常に絶対的に弱い立場に置かれ続けるわけではないのだ。そうした瞬間、彼は人間を支配する得体の知れない力を持った神のかげらとしての姿を表す。人形は人間の立場を脅かし、常に逆も起こりうる。それは危険な綱渡りだ。構造そのものへの負荷を通じて、人間のままならなさ確かめていくようなその形式には、サミュエル・ベケットの作品群のエッセンスを強く感じた。(ベケットの重要な作品のいくつかはロンドンで発表されている)特にラストシーン、自分の身体が何を演じるのか全く知らずに舞台上に臨む彼の姿に、人間が生きねばならない運命をそのまま見せられたような思いがした。だが彼は人形である。死んだ素材で出来た彼がひょいっとテーブルに上がり動き始めた時、何よりもはじめに、彼は「生」を演じているのだと感じた。それはどんな俳優にも不可能なことだ。死せる物体を介して生が演劇的に立ち上がる時。呼吸しないものの息吹を感じる時。息を吹き込まれるのは私たちの方なのだ。彼らが動くたび、不思議な感動を感じるのはきっとそのためなのだろう。

魚田まさや (デイリージャーナル編集部)



ちょっと好色な彼は魅力的な一人のコメディアンだ。しかし彼は自身について語る中で、人形遣いのテクニックを開示し、自らの実在性を解体していく。最終的に人形遣いとテクニックさえあれば、彼の身体すら根本的に不要であることまで明らかにしてし



Blind Summit
 Thank you excellent performance!!
 This is the best show
 「focus」「breathing」
 「fixed point」 satoshi

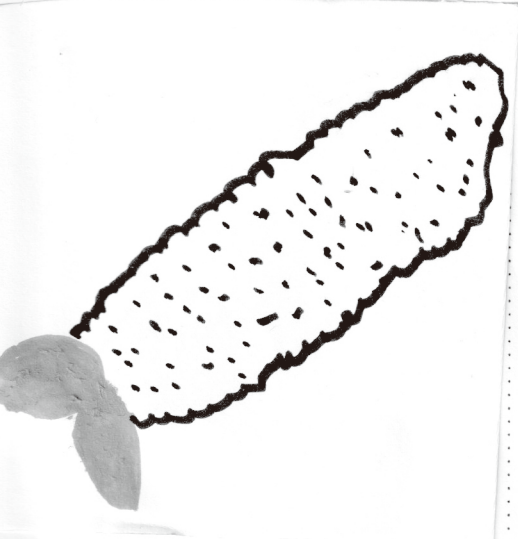
Object
 Oh... object
 What a funny, mature and lovely with human.
 26. Feb. satoshi

The Table モーセにたたり
 あんげうなる人々
 「モーセ」
 「人々」にたたり
 「モーセ」
 SFにたたり
 頭が楽しい
 現実と
 現実
 現実と現実を
 行き来して
 今更便利に
 なるか
 笑った楽しい
 ありがとう!!



おもしろすぎて
 大まんぞく!
 えんじう
 くるみ

初めて「人形劇」スゲー!!
 っと思はしたのくみ重なる
 重なる面白さ、言葉がふたつも伝わり
 ユーモア(時にブラックユーモアも含む)
 リズムとテンポのいい世界さ
 か、い可なり、人間だけが「まて」まて
 ようで、夢の世界、エピソードの
 現実との... いうと、次元を
 いったりまたりする場面、車や乗り物の
 スタッフの多さや舞台のしかけも
 ほんとに温かきユートピア、来られて
 ほんとにふりかたです!!!



ヨーロッパには旧約聖書と
 いう、今も笑いのネタにできる
 古典があるのに、今の東アジア
 にはないな... と痛感した。
 もしかしたら七夕(たなばた)の
 か... 昔は孔子とか白居易とかあつ
 たんだろな... 給湯流茶道より

舞台には4人がいる。人形遣いが3人と、段ボールと布でできた人形がひとり。人形はもちろん他の3人に動かされているが、生き活きと歩き回り、饒舌に話し、そばにいるニンゲン——つまり、人形遣いに話しかける。独立した、非常に明瞭な「ひとりぶん」の存在がそこにある。彼は舞台上に置かれたテーブルから、常に周りを見下ろしている。後ろにいる遣い手を振り返り、アドリブに四苦八苦する字幕をからかい、客席に向かってフランクに語りかける。人形の自分が動くメカニズム、操演のテクニックの解説さえやっつけてのける。彼はいままことに進んでいる芝居ができるまでのことを語る。題材は聖書「申命記」、モーセが死を前にして民に行った説話集である。説話を終えたモーセの死と埋葬までが描かれるが、著者は誰だろうモーセ自身。「モーセは時空を超えた」と冗談めかして紹介する舞台上の彼もまた、舞台に収まりきらず、超越的に動き回る存在として重なる。奇妙な気持ちがしてくる。映像がいつも簡単に流通し、ますます手軽でリアルに見られるようになる現代で、ライブパフォーマンスの価値が問われ続けている。スクリーンの世界から決して出られない映像に対して、リアルで強烈な存在感を放ち、「外」の世

界との枠を揺るがし続ける彼に、生の舞台の一幕を見たように感じた。
稲田和巳（デイリージャーナル編集部）

3人遣いで操演される"BUNRAKU"作品を初めて見た。日本人でも観る人が限られる伝統芸能・文楽が海外でこんな展開をしていることに驚く。名前(ブンラク)は同じでも全く別のものを観た感覚だった。"3人で操演すること"を起点に、動きを発見してそれを物語に落とし込んでいく。見事にオリジナルBUNRAKUが確立されていた。ツアーメンバーは今回の日本公演のついでに本場の文楽を観に行ったりするのだろうか？もしくは既にリサーチしている？日本公演にあたって特別な緊張感とかあったのだろうか？internationalな演劇祭だからこそ起こり得る場所性からくる意味の変化とか、それがお互いに与える影響とか考えると刺激的



だ。知ることも大事だが、知らないからこそできることってたくさんある。大切なのはやりたいからやるってことで、知識は知りたくなったときに知ればいい。今回見たBUNRAKUは、僕には変わった味がした。普通に怖かった。それは、人形モーセの背後にイギリス人、そしてその背後に肩衣を付けた文楽の人形劇師の姿が重なって見えたからかもしれない。この感じって奇妙で面白い。
前田斜め（デイリージャーナル編集部）

チェコの人形劇

カシュパーレクさんとハチャメチャかぞく Divadlo Alfa

チェコ・アルファ劇場の子ども向け公演。演目は3日目にあったダブル・ビルと同じ喜劇だが、野外に舞台を立てての上演はまさにチェコのストリートスタイルで、何度も来日しているアルファ劇場でもなかなか見られない、貴重な機会になるはずだった。……が！天気は気まぐれなもので、雨天により上演はあえなく屋内へ移動……。それでも、会場に収まらなかったおとな向けに急遽振替公演が設定される盛況を見せた。舞台ではカシュパーレク（チェコ人形劇での道化）とその一家がドタバタを繰り広げる。伝統的な技法の芝居でありながら、題材は現代家庭の日常でもおなじみな光景で、日本語化されたユーモラスな台詞も交えた、わかりやすく楽しいお芝居に仕上がった。人形の動きに合わせてさまざまな効果音を鳴らす楽器が、常に舞台の横に見えているのも、子どもたちにとって刺激的で楽しい要素だったのではないだろうか。惜しむらくは、見慣れない人形を至近距離で目にしたせいか、はたまた客席の外側に



ぎゅうぎゅうに詰め込まれたおとなの圧のせいか、肝心の子どもたちがどうもごちなく、笑いが広がるまでにやや時間がかかったこと。今回の公演が素晴らしいものであったことは認めつつ、次のチャンスでは本来の伸び伸びとした空間で、みんなでいっしょに観られることを願っている。
稲田和巳（デイリージャーナル編集部）



MANGA

SONG YUE @eozislet



レクチャー スズナリと人形劇

登壇者：
天野天街
(劇作家・演出家／劇団少年王者館主宰)

飯室康一
(糸あやつり人形劇団みのむし・ITOプロジェクト)

山田俊彦
(人形劇団ココン・ITOプロジェクト)

岡島哲也
(『しがらみ紋次郎』プロデューサー)

司会：
野田治彦 (ザ・スズナリ)



変化する。人形も、それを見る私達も、私達が住む世界も、そして、そんな世界の中にあるスズナリも。

『スズナリと人形劇』はこれまでのスズナリと人形劇の関わりから、これから未来へ向けて、スズナリと人形劇はどのように関わっていくのか考えさせるものであった。登壇者の方々は、人形劇好きならば一度は耳にする方々ばかり。対談は終始笑いを交えた明るい雰囲気にも包まれており、スズナリの劇場の歴史と、人形劇がどう関わってきたかを軽く知る事ができた。今回の数あるイベントの中でも少し特異なイベントであったと思う。

対談が終わり、自分の中で1つ疑問があった。『これから、日本の人形劇について』。この文章を書いている私は現在20歳で、自分で言うのもなんだが若者と言っていいたいだろう。私達、若い世代に向けて、これからのことについて、何かをもらいたかった。しかし、私達持ち前のシャイボーイでそれは叶わなかった、ざんねん……。 a

リルケの詩の中でこんな言葉がある。
『あなたの中で解き明されぬすべての問いに
忍耐強くあれ
そして「問い」そのものを愛せよ』

これからの人形劇の歩み、という「問い」を持ち続け、そして愛そう。
上原英治 (デイリージャーナル編集部)

1981年、日本の小劇場演劇の聖地とされる東京下北沢に、数々の歴史を生み出すことになるザ・スズナリは開館したらしい。アングラムーブメントの中心地とも言える劇場の、アイコン的な看板や怪しげな階段、館内の様子が当時の記録映像で蘇る。日本のアングラ演劇が生まれ躍動していったその流れの中に人形劇作品も確かにあったようである。しかしにその数は相対的に見るとかなり少なかっただろうし、特権的肉体論とか言っていた時代に人形劇師の肩身の狭さと言ったらなかったと思う。それゆえに、僅かな水脈を繋いだ創作の系譜が、今日ここに集まった面々の、特にITOプロジェクト「高丘親王航海記」に流れ着いていることを思うと、日本のオルタナ人形劇史を垣間見た気がして壮観だった。スズナリ×人形劇、その流れの先端に、今ここ下北沢国際人形劇祭があるということが極めてつけである。

前田斜め (デイリージャーナル編集部)

今日の デイリージャーナル編集部

文：
青木直哉 稲田和巳
上原英治 前田斜め
魚田まさや

絵：
風車
川崎光克
有泉拓真

写真：
間部百合

